

木彫による造形研究 2009

岩井 義尚 *Yoshinao Iwai*
(美術学部)

作品の形の素は、「自然のモノをデッサンしていると、その源は球体、それも機械的な球体ではなく、心地良い球体の単体又は複合体である」と考える。私の創作は、この考えを基に「視覚に訴えかけるのに重要である水平要素・垂直要素そのものが創り出す空間」を使い構成している。



岩井義尚彫刻展

2009.9.6 ~ 9.15
名古屋芸術大学アートスペース
T.A.G.IZUTO(名古屋市)

テーマ:「包み込む」「流れ」「和」

作品における一つの方向は、テーマからイメージし、形の根源を動物・植物・自然現象から創作要素を探り、素材(木)を彫ることにより形(Form)を創り出す手法で具現化した立体とレリーフ、もう一つの方向は、木材の持つ存在感・力強さ・素材感を活かし形を彫り出したモノの複数を組合わせて表現したレリーフがある。平面作品はペン画で、多くのフリーハンドの平行線を使い、あるところには色(マーカー)を足し、「小さな平面スペースで奥行きを創り出す」による制作表現を試みる。



Form0911、Form0909 と Form0910 の「遊」シリーズは、1989年大学の北側「アートエリアロードの作品設置」のために考えた多くのアイデアスケッチの中から、彫る木材の形態を生かすアイデアを選択して、新たに考案したスケッチを基に立体化したものである。



Form 0911 「遊 No.3」
クス
H120 × W60 × D29

この作品は、Form0909「遊 No.1」と同様に、三人の子供が絡む形で遊ぶ姿を、クスの木の一本作りで彫りあげたもので、「動き」「流れ」……「和」を表現した作品である。





Form 0909 「遊 No.1」

クス
H130 × W61 × D22

Form0903は、家族・種族……「種」を、ひとつひとつがレリーフ状の厚さ13cm以内のクスの木で彫ったDNA的形態をした4つの集合体で表現した作品である。

Form 0903

クス
H13 × W100 × D200



Form 0910 「遊 No.2」

クス
H82 × W42 × D12

Form0910「遊 No.2」は、二人の子供が手を取り合い浮かんでいる形で、同様の表現をしている。





Form 0908 「姿」

ケヤキ
H54 × W88 × D4.8

Form0908「姿」は、15年前に描いたドローイングを基に、ひじ掛けにもたれかかる女性を、板厚48mmのケヤキの板材に、15~20mmの深さで彫ったレリーフ（浮き彫り）の形で、ゆったり・ゆっくりした「時」の表現を試みている。

Form0901は、ケヤキの一木作りで、木の内側に単純化した精円球を彫り込むことにより、立体の中に「生命」を表現した作品である。

Form0902は、2個のケヤキの木に、植（食物）のイメージをひょうたん状の形態にし、組み合わせて置く形で、「豊作」を表現した作品である。



Form 0901

ケヤキ
H28 × W31 × D12



Form 0902

ケヤキ
H15.5 × W24 × D18



Form 0907

クルミ+A.B.W.+ケヤキ+桧 H53 × W37 × D6

Form0904～0907 は、テレビや雑誌の内から気になる形態をアイディアスケッチしたものを基に、板材を切り抜き加工したもの（有機的な形）と、幾何的な板材を組合せ、「動・静」を表現したレリーフ作品である。



Form 0906

サクラ+クワ H46 × W28.5 × D3.5



Form 0905

サクラ+A.B.W. H46 × W29.5 × D3.5

注) A.B.W.……アメリカン・ブラック・ウォールナット

Form 0904

ケヤキ+A.B.W. H45 × W45 × D5





この三枚の額装のドローイングは、Form0909～0911のアイデアスケッチで、この画像はモノクロだが、コピック(油性)彩色がなされている。

他の額装したドローイング7枚は、上記の三枚と同様に、コピックにより彩色し、ペンにより多くの線で空間を意識したドローイングである。



この2枚の写真は、名古屋芸術大学のアートスペース T.A.G.IZUTO において撮影したものである。作品と作品が程良い距離に保てる空間を持つ展示会場で、木彫作品が展示し易い空間になっている。

